



光琳と乾山

—特別展—
芸術家兄弟
響き合う美意識



根津美術館
NEZUMUSEUM



2018年
4月14日(土) ▶ 5月13日(日)
根津美術館 NEZU MUSEUM
<http://www.nezu-muse.or.jp>

尾形光琳(1658～1716)は、江戸時代のなかばに、日本美術における装飾の伝統を現代のデザインに伯仲する次元にまで高めた画家であり、意匠作家です。小袖の模様を思わせる図様を大画面に適用した「燕子花図屏風」は、そんな光琳の真骨頂を示す作品です。

一方、光琳の弟である乾山(1663～1743)は、やきものの世界に新風を巻き起こした陶芸家です。日本や中国、さらに西洋におよぶ様々なやきものを学びつつ、自らの趣味嗜好をも反映させた多彩な作品を世に送りだしました。乾山の存在により、陶工は芸術家になったと言えます。

本展覧会は、美術史上たぐい稀な二人の芸術家兄弟において展開した多彩な造形、ときに相反し、ときに響き合う美の世界を展観し、そこにどのような美意識の交流があったのかを探り、ひいては光琳と乾山それぞれの魅力を見つめ直そうとするものです。

特別展 光琳と乾山— 芸術家兄弟・響きあう美意識—

第1章 光琳の絵画— 色彩と水墨の相克と調和—

光琳は、俵屋宗達とその周辺で育まれた造形を滋養にして、「燕子花図屏風」をはじめとする装飾性の高い彩色画を生み出す一方、水墨画にも優れた作品を残しました。そこには、宗達のみならず狩野派や雪舟などにルーツをもつ様々な画風が見受けられ、さらに^{くわいすい}鏤絵による乾山焼への絵付けが、光琳のモノクロームによる表現世界に文人趣味や諧謔味を加えます。色彩と水墨、デザインと画の相克と調和が、光琳の画業を特徴づけています。



^{かきつばた すびようぶ}
国宝 燕子花図屏風 尾形光琳筆
 6曲1双 紙本金地着色 日本・江戸時代 18世紀 根津美術館蔵

画家としてのスタートが遅かった光琳が40歳代なかばに到達した最初の芸術的頂点をなす作品。花に用いられたたっぷりとした^{くわんせい}群青や、葉を表すシャープな筆使いによる^{くろせい}緑青が、平面性の強い図様を絵画として支えている。



^{うぶねず}
重要美術品 鶴舟図 尾形光琳筆
 1幅 絹本墨画淡彩
 日本・江戸時代 18世紀
 静嘉堂文庫美術館蔵

「燕子花図屏風」と同時期の作。狩野派風の繊細優美な水墨淡彩に、宗達風の緩やかな線描が組み合わせられている。謡曲「鶴飼」に取材したと考えられる。



^{さびえ かんざんじつとくず かべざら}
重要文化財 鏤絵寒山拾得図角皿
 尾形乾山作・尾形光琳画
 2枚 施釉陶器
 日本・江戸時代 18世紀 京都国立博物館蔵

巻物を広げる寒山と箒を持つ拾得。粗放な筆致であえて稚拙な味わいを狙っている。文人でもあった乾山との合作だからこそ到達し得た画境と言える。

第2章 乾山のやきもの— 絵のあるうつわ—

乾山のやきものの作風は多彩ですが、本展では「絵」をキーワードに特徴ある作品群をご覧ください。まず、見込みに絵を描いた角皿。四角い平面は色紙を思わせ、実用より鑑賞本位です。一方、モチーフの輪郭にそって成形された色絵の食器は、あたかも絵がうつわから溢れてたかのよう。さらに蓋物や土器皿は、器形の素朴さを裏切る芳醇な絵画的意匠が魅力です。光琳は、これらの作品に鏤絵の絵付け以外でも関与したに違いありません。

^{いろえい かえいじゅうにかげつわ か かちようず かべざら いちがつ}
 色絵定家詠十二月和歌花鳥図角皿のうち一月
 尾形乾山作 12枚のうち 施釉陶器
 日本・江戸時代 元禄15年(1702)
 MOA美術館蔵

藤原定家が十二月の花木と鳥を詠んだ和歌をもとに絵を描いた角皿。裏面に、乾山自ら和歌を書いている。京都の^{いんげい}乾(北西)、^{なるたき}鳴滝に開窯して3年後の作。角皿という新規な形式に雅な文学性を盛り込んでヒット商品になった。



特別展 光琳と乾山ー芸術家兄弟・響きあう美意識ー

第2章 乾山のやきものー絵のあるうつわー



重要文化財 錆絵染付金彩絵替土器皿
尾形乾山作 5枚 施釉陶器
日本・江戸時代 18世紀 根津美術館蔵

下地の梅花文の中に繰り返される梅、陽光きらめく海原をゆく帆掛け船、流れる雲を背景とする八重葎、満月に照らされる薄、流水に浮かぶ菱。手で成形した素朴な皿に、技法も意匠も凝ったデザインがほどこされている。



いろえたつたがわもんむこうづけ
色絵竜田川文向付
尾形乾山作 10枚 施釉陶器
日本・江戸時代 18世紀 MIHO MUSEUM蔵

流水に紅葉が流れる情景をかたどる。正徳2年(1712)から享保16年(1731)頃まで、二条丁子屋町に工房を構えていた時期を代表する心楽いうつわである。

第3章 乾山の書画ー文人として、光琳風の継承者としてー

享保16年(1731)頃、乾山は江戸に下り、小さな窯を営みました。しかし、江戸での乾山の作陶の実態は明らかではありません。この時代の乾山の芸術を代表するのは、むしろ絵画の制作です。その魅力は、素人性を留めた画趣と、自賛の書が画と共にかたちづくる書画一致の世界にあります。一方、かつて光琳も一時期を暮らした江戸で、光琳風を披露することも少なくなかったようです。そうした二面性は、光琳の絵画制作にも通じるものと言えます。



けんこうほうしず
兼好法師図
尾形乾山筆
1幅 紙本墨画
日本・18世紀 江戸時代
梅澤記念館蔵

ざっくりとした筆づかいで、庵中に座す兼好法師を描く。兼好作の画中の和歌は、隠棲したつもりが依然として憂き世であることを詠じる。江戸生活に対する乾山自身の不本意な思いも投影されているかもしれない。



でいかえいじゅうにかげつわ かかちよず くがつ
定家詠十二カ月和歌花鳥図 九月
尾形乾山筆
1幅 紙本着色
日本・江戸時代 寛保3年(1743)
根津美術館蔵

かつて角皿にも用いた和歌画題を自らの絵筆で描く。薄と鶉を詠む九月の図。もとは12枚セットで画帖仕立てであったが分割され、掛幅として分蔵される。

【渡辺始興ーもう一人の芸術家】

この角皿の裏に、乾山は「表の一連は画師である渡辺素信が代わって書いた」と記しています。渡辺素信なる画家が手がけたのはもっぱら錆絵の蘭と考えられてきましたが、乾山に代わって書いた「一連」とは絵に添えられた五言絶句の詩の方だと思われます。そしてこの詩の書は、光琳の弟子と伝える渡辺始興の筆と認めてよいようです。渡辺素信すなわち始興は、本展のもう一人の芸術家です。



さびえらんず かくざら
錆絵蘭図角皿
尾形乾山作
渡辺始興画賛
1枚 施釉陶器
日本・江戸時代
18世紀
根津美術館蔵



重要文化財 むさしの すみだがわすみだればこ
武蔵野隅田川図乱箱
尾形乾山作 1口 木製着色
寛保3年(1743) 大和文華館蔵

浅い木製の箱の見込みに蛇籠と波濤と千鳥、側面と裏面には多彩色で薄を描く。光琳風の意匠と乾山ならではの素朴な筆致が融合する。81歳、没年の作。

特別展 光琳と乾山ー芸術家兄弟・響きあう美意識ー

そのほかの展示作品より

- ・重要美術品 あきくさず びゅうぶ 秋草図屏風 伝 尾形光琳筆 サントリー美術館蔵
- ・重要美術品 り はくかんぼくず 李白観瀑図 尾形光琳筆 ブリヂストン美術館蔵
- ・墨菊図 尾形光琳筆 個人蔵
- ・鏽絵楼閣山水図火入 尾形乾山作・尾形光琳画 大和文華館蔵
- ・深省茶碗絵手本 尾形光琳筆 出光美術館蔵
- ・重要文化財 さび え そめつけ きんさいすすきもんふたもの 鏽絵染付金彩薄文蓋物 尾形乾山作 サントリー美術館蔵
- ・鏽絵染付絵替筒向付 尾形乾山作 湯木美術館蔵
- ・滝図 尾形乾山筆 個人蔵

※前期（4月14日 [土]～4月27日 [金]）と後期（4月28日 [土]～5月13日 [日]）で、一部作品の展示替えを行います。記載がない作品は全期間展示します。

『燕子花図屏風』以前の光琳草花図のおもかげ」

「画風高揚期における颯爽たる水墨淡彩」

「光琳の筆墨の冴えを堪能できる珠玉の作品」 **前期展示**

「江戸で学んだ雪舟の山水図巻を胴の四面に展開」

「弟のために描いた下絵にもかからず見応え満点」 **後期展示**

「蓋をあけると染織由来の模様が現れる意外性」

「鏽絵と染付、黒と青で飾られた麗しき懐石具」

「乾山七十歳の心境を画と書と詩に重ねる」

同時開催 展示室6 しょぶろ 初風炉の茶

立夏を過ぎ、茶室で初めて風炉を用いることを「初風炉」と呼びます。これより夏向けの清々しい茶道具の取り合わせが始まります。



しょうずいみずたまんちやわん
祥瑞水玉文茶碗 景德鎮窯 1口 施釉磁器
中国・明時代 17世紀 根津美術館蔵

「祥瑞」は日本の注文により、中国景德鎮窯で作られた鮮やかな青が特徴の染付。白い丸文が珍しいこの茶碗は「祥瑞水玉」として知られる。



ちやしやく ともつつ ほとどぎす かたざりせきしゅう
茶杓 共筒 銘時鳥 片桐石州作 1本 竹
日本・江戸時代 17世紀 根津美術館蔵

江戸初期の大名茶人・片桐石州作の茶杓。付属の書状には、遠江国掛川藩主などを務めた北条氏重の依頼により、石州が特別に削ったものと記されている。

お知らせ

夜間開館

5月8日（火）から
5月13日（日）は
午後7時まで開館。
（入館は閉館30分前まで）



夜間開館期間中、NEZUCAFÉでは
午後5時以降にシャンパンを販売いたします。
アフター5にどうぞお立ち寄りください。

- グラスシャンパン 1,500円（税込）
- シャンパン&プロシュートセット 1,900円（税込）



能管（笛）による仕舞「杜若」

夜間開館の一日、夕暮れの庭園を臨むエントランスホールで、幽玄の舞姿をお楽しみください。

日時：5月10日（木）午後5時30分～6時
出演：九世 観世鍔之丞氏（能楽師）

事前申込は不要ですが、美術館入館料が必要です。
着席観覧ご希望の方には、午後4時から抽選券を配布しますので当館地下1階講堂前へお集まりください。抽選結果は午後5時に発表いたします。（立見でもご覧になれます。）



（イメージ）

庭園からのご案内



作品のご鑑賞とともに、カキツバタの咲く庭園の散策もお楽しみください。(開花予想：4月下旬～5月上旬)
竹林に囲まれた薬師堂周辺の園路の整備も完了し、都心とは思えない静かな時間をお楽しみいただけます。

4月17日(火)から本展期間中、庭園内茶室「披錦齋」でお抹茶と和菓子のセットを販売いたします。(税込1,000円)
庭園の緑を眺めながら、おくつろぎください。

(茶室の利用状況により、販売を行わない日もございます。
この間NEZUCAFEでのお抹茶セットの販売はお休みます。)

庭園内茶室でのお呈茶



(イメージ)

関連プログラム

スペシャルトーク

「光琳と乾山 美意識はどのように響き合ったか」

日時 4月28日(土) 午後2時～3時30分

講師 荒川正明氏(学習院大学教授)

聞き手 野口 剛(当館学芸課長)

会場 根津美術館講堂 定員130名

(申込方法)

当館ホームページの「イベント情報」の申込みフォームから、または往復はがき(1参加者1イベントにつき1枚)に参加を希望されるイベント名・住所・氏名(返信面にも)・電話番号を明記の上、〒107-0062 東京都港区南青山6-5-1「根津美術館講演会係宛」にお送りください。

モーニングレクチャー

日時 4月17日(火)、27日(金) 午前11時～

イブニングレクチャー

日時 5月8日(火) 午後 5時30分～

会場 根津美術館講堂 定員各回130名

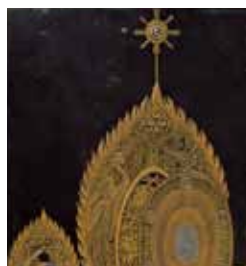
担当学芸員が展示の見どころをスライドを用いて解説いたします。各回とも45分程度。事前申し込み不要。開始の15分前より開場。

*いずれの催事も、先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。参加は無料ですが、入館料をお支払いください。

開催概要

展覧会名	特別展「光琳と乾山—芸術家兄弟・響きあう美意識—」
主催	根津美術館
開催期間	2018年 4月14日(土)～5月13日(日)
開館時間	午前10時～午後5時 夜間開館 :5月8日(火)-5月13日(日)は夜7時まで開館 (入館はいずれも閉館30分前まで。)
休館日	毎週月曜日 ただし4月30日(月)は開館。
入館料	一般 1300円 (1100円) 学生 1000円 (800円) ※()内は20名以上の団体料金、障害者手帳提示者及び同伴者1名の料金。中学生以下は無料。
前売券	一般 1100円 学生 800円 ※ 2018年2月22日(木)～3月31日(土) 企画展「香合百花繚乱」展 開催期間中、当館ミュージアムショップにて販売
アクセス	地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線(表参道) 駅下車A5出口(階段)より徒歩8分、B4出口(階段とエスカレーター)より徒歩10分、B3出口(エレベーターまたはエスカレーター)より徒歩10分
住所	〒107-0062 東京都港区南青山 6-5-1
お問合せ	tel. 03-3400-2536 (代表) website http://www.nezu-muse.or.jp *本資料掲載の内容は、予告なく変更になる場合がございます。最新の情報は当館広報課 (press@nezu-muse.or.jp)へお問い合わせください。

次回展



企画展 はじめての古美術鑑賞 —漆の装飾と技法—

2018年 5月24日(木)～7月8日(日)

我が国に伝世した日本や中国、朝鮮、そして東南アジアの漆器を取り上げて、それらの装飾と技法について学びます。

(左) 重要文化財 嵯峨山時絵硯箱(部分) 日本・室町時代 15-16世紀 根津美術館蔵
(右) 彫彩漆屈輪文盆(部分) 中国・南宋時代 12-13世紀 根津美術館蔵 永田牧子氏寄贈

設備整備休館のお知らせ

次回展「はじめての古美術鑑賞—漆の装飾と技法—」終了後、2018年7月9日(月)～8月31日(金)は、設備整備のため庭園、NEZUCAFEを含む全館休館とさせていただきます。あらかじめご了承ください。

9月1日(土)からは企画展「禅僧の交流—墨蹟と水墨画への誘い—」を開催予定です。